
エウロパの旅人 建国篇

山田 潤

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

エウロパの旅人 建国篇

【Nコード】

N9756Z

【作者名】

山田 潤

【あらすじ】

いよいよ、国の再興が本格派する。丈、雄一郎、正、それぞれのパーティーは生存者を探し出し、復興のパラダイム（規範）を指示しつつ旅を続ける。また、生存者のコミュニティ同士が連絡を取り合い、技術を共有しようとする動きも見られ始めていた。そんな時、ホモローチのセカンドジェネレーション（第二世代）の脅威が十州道のコミュニティを襲い、新たな闘いの幕が開く。生存者達の運命は、そして被災前、大量に出荷されたバイオ流体緩衝材の行方が明らかにされる。

トリロジー、エウロパの旅人 最終章の予定で連載を始めますが、
展開次第では新章への突入も有り得ます。

いざ、鎌倉

いくら僕が視覚を開放しようと、俯瞰で見ることのできるサイトに搜索能力は及ばない。彼女のお陰で生存者を見つけ出す効率はぐんと上がっていた。また、ドーム建造という具体的な復興プランは持たずとも、あれほどの災禍を生き延びた人々の中にはバイタリテイトと克己心に富んだ方が多く、身を寄せ合った人々は力を合わせて生活を再建しようとしていた。

そしてコミュニティ同士が連絡を取り合えるようになると、それぞれの技術は離れたコミュニティにも速やかに浸透して行く。医療技術のないコミュニティには医師が派遣され、発電設備が作れないところには電気技師が送られた。労働力のあるコミュニティでは僕達の助力なしでドームの建造が始まっているとも聞いている。これが伊都淵さんの目指す未来だったのだろうか、僕は彼の先見性に痛く感心していた。

外壁を積み上げる段になるとそのコミュニティを後にしていた僕にとって、工事の進捗状況は非常に気になるものだったが、ようやくプロデューズドバイ所教授の脳味噌の使い方にも慣れ、サイトの記憶を投影する　つまり、彼女に見てきてもらった映像を僕も見ることができるようになっていた。手を振る真柴さんや斎藤さん達の姿、佐伯医師があちこちのコミュニティに出張される姿を脳裏に映し出し、僕達の使命が順調に果たされていたことに安堵した。

「あなた方のお陰で、ここの人々も希望を持つことが出来ました」
僕と原田兄弟は、およそ1400年前になんとか天皇が造ったという大きな寺院跡に居た。政変・飢饉・干ばつ・大震災に天然痘の流行と、苦難の時代に建てられたこの寺院は医療や福祉に熱心だったそうだ。その意思を明確に引き継がれたのか、ここでただひとり命を取り止めた泰然法師だ。彼は存在を否定されていた地下建造物に生存者を集め、軽装だった人々に法衣を与えて暖を取らせ、食料

として凍死した鹿の肉を振舞ったと言う。平時なら言語道断だと責められもしようが、この非常時に於いては素晴らしい判断だったと言えよう。

余談だが僕は結婚する前、日向子とここを訪れたことがある。ポケットに入れておいた鹿せんべいごと尻を齧られズボンを涎でびしょびしょにされた。多くの観光客が居て鹿を追いかけ回す訳にも行かず、いつか復讐してやろうと思っていた。泰然法師は意図せぬままに僕の恨みを晴らしてくれていたのだった。思わず知らず下がる溜飲に、原田兄弟は妙な顔で僕を見つめたものだった。

「いえ、我々は東北のカリスマの命に従って動いているだけです。如何でしょう、こちらでもドームの建造を考えてはいただけませんか？」

「知恵とお力を拝借出来るなら願ってもないお申し出です。なにせ拙僧は寺のこと以外、何も知りませぬ故」

「なれば、早速有志を募ってバイオ流体の培養にかかりたいと存じます故」

……簡単に仰々しい物言いがうつつてしまう辺り、僕はまだ自己が確立されていないようだ。

「じゃあ、その役目は拙者どもが、しかと仰せつかったでござる」

僕の憂慮など歯牙にもかけぬ様子で原田兄弟が言い、彼等は生存者の集まる中室と呼ばれるところへ身体を低くして走って行く。それじゃあ忍者だよ……

「ほっほっほ、楽しい方々ですな」

恐縮する僕をよそに、泰然法師は高らかに笑われた。これが本当の泰然自若ってヤツなのだな。

実のところ、僕は宗教家と呼ばれる人々にあまり良い印象を抱いてはなかった。彼等の説く教義だか教理だかは高尚だが、彼等自身本当にそれに沿った生活をしているものだろうかという疑問があった。亡くなった人々につけられる名前に値段の差があるのも納得が行かなかった。有り難がる物は目に見えず、聞いててもちんぷん

かんぷんな経文も払う金額で違うと言う。ただ、これもやはり？人？によるのだろう。痴漢行為をする警官も居れば、生徒に手を出す（僕はやってない）教師だって居る。僧侶にせよ、一般人にせよ、悪いヤツは悪い。良い人は良いのだな、と思いました。何だか小学生の作文みたいになってしまった……

そんなこんなで僕達の次の仕事はこの寺院跡になった。解体された鹿の内臓がサイトの御馳走となり、犬や猫を掘り返す必要もない。山ほどの凍った鹿が敷地内に埋もれていた。

このコミュニティの住人は参道で土産物屋や食堂を営んでおられた方々が多く、女性比率と年齢層が高めだ。ご主人は五十代、六十代といったところで、二十代は土産物屋の看板娘だった女性と駐車料金の徴収係だった同じく女性がひとり、倒れた大仏の隙間に潜り込んで難を逃れた観光客の男性がひとりの都合三名。警備員の格好をした男性が二人居たが、どちらも四十代だった。これでドーム建造が進むだろうか、という懸念が僕にはあった。

「へーえ、そんなんでできるんやあ」

「せやなあ、穴ぐらに住むよか、そっちのほうがええなあ」

「カリスマはんもえらいもん、思いつきよんなあ」

関西弁でそう聞かされると、何やら危機感が遠ざかって行く気がした。だが、和んでいてドーム建造は始まらない。食料がふんだんにあったことから、僕はあることを思いつく。

「是非お力をお借りしたいんですが」

了解、二人送り込もう。

真柴さんは労働力の派遣を快諾してくれた。生まれ変わったように、勤勉になった中島、遠藤の両名を派遣してくれると言う。

ここには若い男性は少ないが、病院の技師だった二人がやる気になってる。ただ、我々には交通手段がない。

「迎えにあがります」

佐伯医師の居るコミュニティからもふたりの男性を借り出す約束を取り付けた。

「こつという土地柄ですからな、重機リースの会社となると街の方まで行かんと……あつ、ちよつと待ってください。法華堂を工事しておつたはずです。あそこに建設業者がぎょうさんの重機を持ち込んでおりましたな」

法師の話聞いた僕達は氷の丘陵地帯へと向かう。シヨベルカーでも見つければ大幅な労力の軽減が図れるというものだ。現場では都合良く数台の重機とダンプカーが折り重なっていてくれたが、転倒したそれらのバッテリーから電解液が流れ出しておりスタータは回らない。大型のディーゼル発電機もあつたのでなんとか持って帰れないものか……と、唇を噛んで考える僕に海地が言った。

「押しがけすれば？」

そうだつ！ 何故、それに気づかなかつたのだろう。丘陵地を上ってきた訳だから下り坂がある。そして僕に馬鹿力があることをすっかり忘れていた。えらい、えらい、と風真に頭を撫でられた海地は迷惑そうな顔をしていたが、僕は上機嫌となっていた。

「押しぞ、ギアは3速ぐらいに入れておいて、勢いがついたらクラッチを離すんだ」

「あいよー」

シヨベルカーの運転席には風真まで乗り込んでいる。どつちか手伝ってくれたらどうなんだよ。

9・02以来、二ヶ月半ほど火を入れられることのなかつたエンジンは、なかなか息を吹き返してくれない。それもそのはず、氷の坂道には一切の路面抵抗がなく、駆動軸側からクランクシャフトを回してくれるだけの力が得られないのだ。かかりかけたエンジンが雄叫びを上げる前にシヨベルカーはすーっと滑って行ってしまふ。結局、平坦路を押し羽目となつた。キャタピラで走行する重機だ、僕の馬鹿力をもつてしても時速10kmまで上げるのは容易ではない。数百メートル押し込んだ辺りで、ようやくエンジンがかかり、僕は思いっきり排気ガスを吸い込んでしまった。

「ここで待ってるから二人で発電機を取ってきてくれよ、重機の取

り扱いは慣れたもんだろ？」

四肢は梓先生ご自慢の品でも心臓はオリジナルだ。僕の心臓と呼
吸器系は音を上げそうになっていた。へたりこんで力なく声を上げ
る僕に車上の二人は楽しそうに返してくる。

「りよーかーい」

いい気なもんだ……

疲労困憊して寺院跡に帰り着いた僕に、真柴さんから連絡が入っ
た。

二人は先ほど送り出した。ところで古都府は知っているかい？
あそこの病院とコンベンションホールに20名以上の生存者が居
るそうなんだ。短波無線で連絡が取れた。氷のドーム建造に興味を
持ってくれている、なんとかして胚とトコログリアを届けてやるこ
とはできないだろうか？ 培養が済み次第、我々が建造の手伝いに
出向く。

頼もしい言葉だった。真柴さんや佐伯医師のような人々が、きっ
とどこかに生き残っている。いまは孤立していても、このネットワ
ークは必ず繋がる日が来るだろう。そしてその時こそ、日本再興の
日になるはずだ。

「サイトに頼んでみます」

伝説では赤ん坊をさらうとまで言われたイヌワシのサイトだ。5
00ミリグラム容器を数個運ぶぐらい雑作もないだろう。伊都淵さ
んの掲げる日本再建プロジェクトは、いま間違いなく独立独歩の道
を歩み出していた。

Sympathy

「スマートグリッド……ですか？」

石井の提案に、作業の手を止めた雄一郎が聞き返す。

「ええ、今のところ風が止む心配はありませんが、東北のカリスマが言われる通り、再度の地軸ズレが起きた時、この場所が安定した風力を得られるとも限りません。ガスタービン発電と太陽光発電、バイナリ地熱発電も合せて電力の安定化を図りたいと思います。余乗分は新たに発見されたコミュニティに回せるよう、送電設備も作って行きたいと考えています。作業を終えても電力班はドーム建造に回さず、そのまま発電プラントの構築に就かせたいのですがどうでしょう、許可をいただけませんか？」

勤勉な労働力の多いこのコミュニティにおけるドーム建造作業は順調で、既に外壁の積み上げにかかっていた。地下住居もあり、住民全員がトコログリアの接種を済ませている。一日や二日の遅れが彼等の生命を脅かすことにはならないだろうとの見通しが雄一郎にはあった。

「私に許可を求める必要はありません。あなた方が他の生存者のことを考えていただけるのはありがたいです。どこにも技術者が残っておられる保証はありません。是非、そちらを進めて下さい」

何年か前、原発事故で出た放射性物質を含む廃棄物の受け入れを拒否した自治体があったことを雄一郎は思い出していた。？頑張り東北？？日本はひとつ？の美辞麗句は、危機感が足元に及んだ途端？ふるさとを放射性物質から守ろう？？子供を放射性物質から守ろう？と、すり替えられていた。物ばかりが溢れ、痛みを分け合おうとする気持ちをなくしてしまったこの国で、教団時代、周辺住民から蛇蝎の如く忌避されていた彼等が、そんな申し出をしてくれたことが雄一郎は嬉しかった。

「良かった！ 早速、中川さんにも伝えてきます。忙しくなるぞー」

石井が駆け出して行く。ドームの基礎を囲むように設置された風車群に向かって行く石井の姿に、一ヶ月前のひ弱だったデクの面影はない。

「大した変化ですね」

榊が肩を並べてきた。

「日常の小さな躓きが、彼等に魔の時を呼び込ませ、そこにつけ込んだ連中にいいように利用されていただけなんだろうな。誰しもが彼等のようになってしまふ可能性はあった。自分で考える力を取り戻した彼等にもう心配はない。そろそろ生存者捜索に戻る時期なのかも知れない」

「去るとなると案外名残惜しいもんですね」

すつと背後に立った井上が感慨深げな声で言った。

「ああ。だが、そうも言ってはおられまい。今夜にでも話すとしよう」

「えっ！ もう行かれてしまつんですか？」

石井が驚いたように席を立つ。その声に夕食のテーブルに着いた全員の視線が注がれた。

「鈴木さん達が、ここを離れられると言われたのよ」

石井の右隣に居た乾という中年女性が状況を補足して伝える。よく通る声だった。

「他のパーティーは既に複数のドーム建造に携わっており、完成したものもあると聞いています。競争意識はありませんがトコログリアの残量も心細くなってきました。補充に戻ることにでもなれば、遠回りをして救える命を救えなくなる場合だつてあるでしょう。出発を考えたのは、そのせいでもあるんです」

「でも……鈴木さん達に教わりたいことが、まだまだたくさんあるんです」

「我々の都合で引き止める訳には行かないよ」

口をへの字に結んだ石井に、隣に座つた中川が肩に手を置いて言

った。この二人がコミュニティのリーダー格となっていた。

「私に教えられることなど何もありません。あなた方は人を思いやる気持ちをお持ちですし、住民の皆さん全員が自分のなすべきことを知り、それに打ち込んでおられます。我々が皆さんから学ばせていただいているくらいです。なあ」

同意を求められた榊と井上が厳かに頷く。犬達の世話をしてくれていた少女が雄一郎のテーブルに歩み寄ってきた。トコログリアの接種を最初に受けたリエと呼ばれている娘だ。彼女は震える声で言った。

「いつかまた、きっと逢えますよね」

「君が勇気を出してトコログリアの接種を受けてくれたお陰で皆さんがこうしていられる。ありがとう」

雄一郎が立って長く伸びたテーブルに座った面々を見渡す。屋外で監視にあたっている数名を除く住民全員が揃っていた。

「我々は、あなた方をひとりとして忘れることはありません。いつか全ての生存者が安心して生活出来るようになった時、我々はもう一度ここを訪ねたいと思います。立派なドームを、発電プラントを作り上げて下さい。困った時には仲間の誰かが必ず駆けつけるようにします」

リエは雄一郎の背中に顔を埋めて泣きじゃくっていた。井上がその背中をさする。まばらに沸き起こった拍手がスタンディングオベーションに変わっていった

The next opponent (次なる敵)

「アーク……ですか？」

恒例となった定時連絡で伊都淵さんが言った。

そうだ、A・R・K 氷のドームって呼び方はどうも個性に欠ける。ノアの箱舟はゴフェルの木で作られたんだ？ ゴフェル、ゴエル、コリー、氷 ばんざーい！ ばんざーい！

……大丈夫か、このオヤジ。依子さんが無事に男の子を出産されて、どこかのタガが外れてしまったのではないだろうか。勿論、能力に秀でたおふたりにお子さんが産まれたのは喜ばしいことだ。その子が成長すれば僕のような臨時雇いへの依存度も減り、真由美さんとの家庭を築ける日も遠からず訪れるはず。氷で出来た住居でも、団樂で温かい家庭を。「では、バイオ流体緩衝材はどう呼べばいいのでしょうか」

長つたらしいので？赤いやつ？で済ませていたが、ドームの愛称を考えていた伊都淵さんなら、きつと素敵なネーミングを思いついていたに違いない、と僕が訊ねる。

えっ？ あっ、うーん、それは……

しばし間があった。

？赤いやつ？でいいんじゃないのか？

考えてねえのか、このオヤジは……

そうか、その田下氏は、おそらく呼吸器系の疾患があったのだろうな。P300Aが免疫細胞を活性化させることはわかっていても、それに必要な投薬量も効果の個体差も明確にはなっていない。あの時、伊都淵が頭を開かせていてくれればな。もう少し公共精神に富んだ男だったなら、その人も救えたのかも知れないな。

これは所教授の声だ。杜都市の親機に音声会議装置を繋いだため、定時連絡は衛星電話ミーティングに姿を変えていた。つまり端末があればどこからでも参加者全員の声が聴けるようになった訳だ。

こらっ！ 所、お前は諦めたって言ってたじゃないか。パパになつて上機嫌な俺に水を差すようなこというな。

ええ、あの人が居なければ、我々もどうなっていたか……ドームの建造は順調です。ここには設備も整ってますし、住民も勤勉な方々ばかりです。

これは雄さんの声だ、カルト集団にとっつかまって、随分と酷い目に遭われたらしい。そして伊都淵さんのクレームはスルーされていた。

とにかく、無事で良かった。そのド……アーク建造は順調に進んでいるのか？ 雄のことが心配で仕方ない人が、ここにいる。元気な声を聞かせてやれよ。

中ノ原市の声は誠さんに代わっていた。雄さんのことが心配で仕方ない？ 誰だろう……

亜希子です。ご無事でなによりでした。

いえ、藤井さんはその生活に慣れましたか？

なんだよ、いつの間に雄さんたら彼女をこしらえてたんだ。しかも女性が『アキコです』って言ってんだから、もうちょいフランクに話しかけてやればいいものを 相変わらずの堅物だな、僕が手本を見せてやろう。

「あのう……誠さん、真由美さんはそこに居ないんですか？」

ああ、具合が悪くて休んでる。タケ坊のせいだぞ。

僕のせい？ なんで？ 所教授と誠さんの含み笑いが聞こえてきた。

悪阻だよ。梓が診たから間違いない。

えーっ！ 確かにあの時、真由美さんは『ここにあなたの分身がいる』と言ったが えっ？ まさか……マジで？ ばんざーいっ！ つて、僕も伊都淵さんレベルだ……

やるじゃねえか、この百発百中男め、嫁さんを亡くしてどれだけも経つてないくせによお。

……。この混ぜ返しはターちゃんだった。

では、本題に入ろう。現在建造中のものを入れ、ド……アークの数は23、みつつのパーティーだけでは行かなかつただろう。生存者が新たな生存者を発見し、知恵と技術を共有し合う。短波無線とサイトの活躍も非常に有効だったな。残念ながら、ド……アークの建造総数は300〜400に下方修正せねばならないが、コミュニティ同士の連携が顕著になってきているようだ。持つものが持たざるものへ。労力の足りない所へは労力を、医師が必要なド……アークには医師を、とみんなが助け合っている姿は胸を打つものがある。

スルーされ続けた伊都淵さんが、急に畏まって話し始めた。彼の言うとおり、真柴さんのような方々があちこちに居られたのだろう、これも喜ばしいことだ。ただ、命名した伊都淵さんでさえ完全には？氷のドーム、イコール、アーク？とはなっていないようだった。

丈君が最初に建造に手を貸したドームではクローラも作り上げたそうだな。

「ええ、電子機器に詳しい女性がいらしたんです。リーダー格の真柴さんって方は機械工作が得意だったようで、僕が見つつけてきた軽トラックを伊都淵さんの設計通りに作られたそうです。防護柵も作っていたきました」

そうやって移動手段を手に入れることが出来れば、更にアーク間の交流も広まってゆくはずだ。

でもさあ、あつちに二人、こつちに三人って感じで生存者が見つかる俺のパーティーでは既存のド……アークに収容するパターンが多いんだ。なにせお年寄りが多い地域だからな。

ターちゃんが言った。僕達もここに来る途中、四人の女性を見つけていたが、そこにド……アークを建造しるとはとても言えず、佐伯先生のところに身を寄せてもらっていた。

それもやむを得ない。お年寄りでなくともコミュニティの人数が少なければド……アーク建造は無理だ。そういった場合には既存のアークで引き取るしかない。そしてそのアークが満員になれば、

新しいものを建てればいい。ただ、全てのアーチ建造に我々が力を貸すというのも良くないように思え始めた。

パラダイムを示した後は、ある程度人々の自主性に任せようと言っただな。

所教授が訊ねる。

ああ、反対か？

いや、お前の言う通りかも知れん。なんでもかんでも人に任せるのが習い性になってもいけない。鈴木君、トコログリアの残量は？

10瓶を切っています。

本田君、小野木君は？

似たようなもんかな……

「僕は、えっと……14瓶の残りです」

実はまだ18瓶残っている。決してサボっていたわけではないが、残量が一番多かったことに気が引けて僕はサバを読んでしまったのだ。

川崎君にクローラで届けてもらおうと思っていたが、そういうことなら一度、帰還するのもいいだろう。君達にも休暇が必要だ。

休暇！ 僕は飛び上がりばかりに喜んだ。中ノ原市を経って二ヶ月半、それでも真由美さんに逢えるなんて。

ところで伊都淵、それはお前の発案なのか？

少し間があつて伊都淵さんが答えた。

……いや、カジさんだ。だが、俺もそれもいいかなと思つてたところだったし……

だろうな、お前のような甘い男が、そんなことを言い出すはずがない。俺は最初から人々の自主性を重んじるべきだと思つていた。個々が強くならねばなんのだ、特にこんな世界では。

鎮静の見られる今だから言えることだろう、それは。厳しいばかりでは人々も途方に暮れていたはずだぞ。それに、そう思つてたなら最初から言えよ。カジさんの発案だから賛成だつて？ さっきから気分の悪いヤツだな、お前は。

お前は昔から弱者に甘すぎるんだ、それが小さな新大脳皮質のせいかどうかはわからんがな。

あっ！ この野郎、みんなが聞いてる前でそれをいうか。お前が昔、梓、梓ってボロボロ泣いたのを黙ってやってるのに。

泣いてなどおらん！

いいや、泣いたねっ、おんおん泣いた。

くっ……もう、杜都市にトコログリアは送らんからな。

へっへーだ、成分構成さえわかれば、どれだけでも作れますよーだっ！

子供か、このふたりは……誰もなにも言わないところを見ると、みんなも呆れ返っていたのだろう。

あたっ！

っつっ……何をする

パチンと音がして二人の声が上がった。これはおそらく業を煮やした依子さんと梓先生二人の頭でも叩いたのだろう、いい気味だ。

その時、どの回線ではわからなきが、けたたましい音で警報が鳴り出した。

誰のところだ？

どうやら、ここみたいだ。

警報はターちゃん和村山さんが担当する十州道のコミュニティで上がっていたようだった。

侵入者あり！ 通信、切りますっ！

子供の喧嘩みたいなものを交えながらも和気藹々と進んでいた衛星電話ミーティングに緊張感が漲っていた。

Second generation (第二世代)

「なんだ、ありゃあ……」

正があんぐりと口を開ける。監視用モニタに映し出されたものはホモローチよりひと回りデカく、全身を体毛が覆っている。異様に長い腕の下に節足は生えておらず、障害物を無造作に払いのけて前進してくる様は、かなりの膂力を感じさせる。ざっと数えただけでも五十体はいそつだ。

「ホモローチなのか？ 新沼君、音波発振器の用意を」

人間の聴覚では認識不可能な音波がアークに取り付けられたスピーカーから発せられた。

「効かないっ！ どうしよう、ムラさん」

モニタを眺めていた新沼が村山を振り返る異形の集団はホモローチ対策として植えたハーブも踏みつけて前身してくる。

「夜半で屋外に出ている者が居なかったのが幸いだ。防護壁を下ろそう」

「俺が！」と、正がスリングの解除に向かった。

丈の発案で採用された防護壁は、天井下部に張り廻らせたキャットウォークに吊り下げられており、スリングによるロックを解除することによって瞬時に氷のシャッターが引き下ろされる仕組みになっている。ズシンと重い音がして全ての入り口が閉じられた。

「ふう、間に合ったみたいだな。しかし、なんなんだ、こいつ等。ホモローチじゃないのかよ」

会議室に戻った正は防護壁を押ししたり、手にしたオール状のようなもので叩いたりする姿を眺めて言った。氷で出来たそれに手を掛けられるような所はなく180kgのバラストがシャッターを閉じる力に変換されている。丈か雄一郎でもなければ持ち上げられるものではない。すると今度は外壁をよじ登ろうとしてきた。こいつは襲撃を想定していた訳ではないが、何度も水をかけては鏡の如き

滑らかさに仕上げられた氷の曲面だった。氷壁に挑む登山家並みの装備がなければ歯が いや、爪が立たない。助走をつけ外壁に飛び付こうとする異形の者も居たが、一秒たりとて氷の曲面に取りついては居られなかった。音声はないが滑り落ちては歯を剥き出して唸っているようだ。

「ホモローチとは違うようだな、他のアークは大丈夫なんだろうか？ 杜都市を呼んでみよう」

十州班からの連絡を待っていたのか、伊都淵がすぐにコールに応じた。現況と異形の者の風体を村山が告げる。

ふむ、体毛があつて腕が長いか 連中、？ 乗り換え？ を覚えたいようだな。さもなければ氷が溶けてしまったこの時期、海を渡つてはこれまい。

「乗り換え……ですか？」

そいつを見ていない現状では想像の域を越えないが、おそらく人間に遺伝子導入する前に、オランウータンか何かとでも掛け合わせたんじゃないだろうか。トランスジェニックならぬ、トランスフージェニニックだから？ 乗り換え？ と言ったんだ。俺の予想通りならホモローチのセカンドジェネレーション（第二世代）つてところだろう。こうなる以前、台湾に密輸されたオランウータンを中国が引き取って吉林省に放したという報道があつた。もしか、とは思っていたんだがな。

「すると、こいつ等もやっぱしメイド・イン・チャイナな訳？」

正が送話口に顔を寄せる。

オールのような物を持っていると言っただろう。ボートで海を渡ってきたのだとすれば、やはりアジア圏からのお客さんだろうなとなると、日本海側全域がやばいぞ。

「お客なんて品の良さそうな連中じゃないぜ、こいつ等は。撃退するいい方法を思いつくのがタツキーの役目だろ？ ハーブも音波も効かないんだ、なにか考えてくれよ」

東北のカリスマと呼ばれる伊都淵も、東日本大震災のボランティア

アに励んだ時代からずっと一緒だった正にかかつては形無しだ(？錯覚の閃光？参照)。

タツキーは止めるってば。顔の横に出っ張りのあるのは居ないか？

「ちよつと待つて 居た、居た、後ろのほうで指示を出しているみたいだ。こいつ等、前のより一段と統制がとれてやがる」

おそらく、そいつがボスだ。しかし、脱線した高速鉄道の車両を埋めちまう連中だから犬に近いのかと思っていたが、よりによってオランウータンとはな……

「あははは って笑い事じゃないってーの！ どうすればいいんだよ」

待つてくれ、考えてみる。

数秒あつて伊都淵の声が返ってくる。

応急措置だ、猿の嫌う音波を探してみる。音波発生装置の出力を100デシベルに固定して、スイッチのオンオフを繰り返せ、手でPWM制御をするのと同じことだ。奴等に変化が見られる周波数域をモニタで見つけて固定してみてくれ。

「わかった、やってみる」

正が答えると同時に村山が作業に取り掛かる。

「あつ！ 撤退し始めたぞ」

よし、その周波数域で固定だ。奴等の動きはどうだ？

「えつと、50mぐらい後退したところで様子を伺ってる感じかな。こいつ等も頭が破裂して死んでくれたりはしないもんなね」

ホモローチほど短命ではないにせよ、自然の摂理に背く遣伝子の掛け合わせである以上、長くは生きられまいとは思うが……」

「思うが、なんでしよう？」

杜都市でも老人ばかりのシェルターをホモローチに襲われ多くの犠牲者を出した。そこを担当していた村山に忌まわしい記憶が蘇る。

村山君か、先ず十州道全てのアークとシェルターに連絡を取つて、襲撃の危険と周波数域を伝えてくれ。オランウータンは異種交

配をする、従ってサイトカイン・ストームへの耐性も強いと見るべきだ。奴等が死滅するのを待っただけの体力が全てのコミュニケーションがあればいい。そうでなければ、こちらから打って出る必要も生じる。勿論そうなれば応援には行くが、すくなくとも2〜3日はかかる。

「それまでは様子を見ながら耐え忍ぶしかない、ということですか」
「そうだ、所達にも相談してみる。奴等に動きがあれば連絡をくれ。」

通話を終えた伊都淵は、すぐに丈を呼んで状況を説明した。

「すまないが、サイトの力を借してもらえないだろうか。十州道を襲ったのがホモローチの第二世代なのかどうか、奴等の上陸規模、他の日本海側はどうなのか、我々が足を運ぶより早くサイトなら見てこられるはずだ。こここのところ通信波に気になるノイズも入ってきている。君が担当するコミュニケーションにも、至急連絡をとってくれ。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9756z/>

エウロパの旅人 建国篇

2012年1月6日07時55分発行